雲南麗江の都市空間と宮室建築

ナシ土司政権の都としての麗江研究

THE URBAN SPATIAL STRUCTURE AND PALACE BUILDINGS IN LIJIANG, YUNNAN

A case study of Lijiang as a capital of Naxi Kingdom in Southwest China

包 慕 萍*

Muping BAO

This essay analyzes the urban spatial structure and the chronology of palace architecture in *Lijiang*, the capital of the *Naxi* kingdom, from the fourteenth century to the beginning of the eighteenth century under the rule of the *Naxi Tusi* (indigenous rulers). They possessed the following characteristics. There was no city wall and the steep terrain was exploited for defense. The palace buildings were located at the foot of Huang Mountain, at the summit of which there was a ritual altar *Tiantan*. The eastern direction had higher status, and the administrative (ruling) spaces and the residential spaces were arranged in a row rather than front to back. The *Zumiao* (mausoleum for ancestral worship) and the *Shejitan* were located front to back on Huang Mountain rather than to the left and right of the palace. In addition, the commercial district was to the left of the palace. The style of the palace buildings showed characteristics of the western region of Yunnan.

Keywords: China, Yunnan, Lijiang, Tusi, Naxi ethnic group, Urban History

中国, 雲南, 麗江, 土司, ナシ族, 都市史

1. はじめに

前近代の中国都市史研究は国際的に展開されており、その蓄積は厚い¹⁾。ただし、歴代の都城や陪都が主な研究対象となっている傾向が見られる。それらの都城制度や空間構成が如何に周縁の朝貢国や王国へ影響を与えたのかが重視されてきた。筆者は中国中央政権と朝貢関係が持ちながら、独自の政権が有した周縁地域の都城に注目し、内モンゴル地域にあったアルタン・ハーン政権の都城フフホトを研究してきた²⁾。本論文では、フフホトと同じく周縁地域に位置し、かつ、農業・遊牧地域の境界線に立地するナシ³⁾ 土司⁴⁾ 政権の都城であった麗江を研究対象とし、ナシ土司の王権が都市空間にいかなる影響を与えたのかという視点からその都市空間構造を究明し、これまでの中国都市史研究と相対化する狙いがある。

雲南の場合、元朝以来、中国の版図に収められながらも、実際、多くの地域では、土司政権によって支配されていた。麗江のナシ土司の支配権が元朝のクビライ・ハーンに認められ、明と清初まで追認されていた。それが清中期の1723年になると、清朝が「改土帰流」⁵⁾ という内地化政策をとることによって、世襲制の土司制度が廃止され、土司（土知府）は「通判」に降格し、その支配権は清朝政府が新たに設けた「県」に移されて、ナシ王国は終焉となった⁶⁾。このような経緯を経て、麗江の都市空間構造もこの中央対周縁の政治構図の中で変容してきた。

「改土帰流」によって土司の支配権が剥奪される前まで、ナシ土司政権は漢文化の儒教という支配原理を導入せず、世界宗教のチベ

ット仏教に目を向けて、チベット仏教を導入した。さらに、麗江は、農業・遊牧境界地帯に立地したので、雲南とチベット間の茶馬互市の交易ルートの拠点都市であった。本論文では、土司王権の都としての麗江の都市空間構造を明らかにし、ナシ土司政権の存続期を考察対象にする。

現代では、麗江はナシ族が集住する麗江地区の中心都市で、1986年に中国歴史文化名城に指定された。さらに、1996年2月の麗江地震の直後に世界遺産に申請され、1997年12月に登録された⁷⁾。本論文では、麗江市の中でも、古い市街区である大研を考察対象地にする。

世界遺産となった麗江の注目度は高く、多分野に渡って研究されている。麗江ナシ土司と明朝及びチベットとの関係について、山田勅之が数篇の論文で取り上げている⁸⁾。河原洋子は、麗江の白沙の町並みの歴史的建築、主に民家の空間構造を分析している⁹⁾。山村高淑は、世界遺産登録後の観光産業の発達による住民構成や産業の変容を明らかにした¹⁰⁾。

本論文では、文献史料の解読と現地での空間構造調査の結果を照合して、都市空間構造を解明する。文献史料では、正史、地方志、碑文などに加え、建築の建設年代では、主に1743年成書の『麗江府志略』¹⁾に従っている。1743年は、ナシ土司の支配権がすでに剥奪されて20年も経ており、ナシ土司の宮室に関して追述となっているが、現存する文献の中で、唯一、建物の建設年に触れており、かつ、一番古い記録となっている。ほかに、1922年に雲南に来て、27年間

* 東京大学生産技術研究所 協力研究員・博士(工学)

Assoc. Research Fellow, IIS, The University of Tokyo, Dr. Eng.

も麗江で生活していた Joseph F. Rock ^{※11)2)} の収集した資料や写真、1938 年に麗江で建築史的調査を行った劉敦楨の報告書と日記 ³⁾ など を参考にした。

2. 中国周縁地域の都城としての空間構成

麗江を都にしたナシ王国は、中央政府に帰属する以前に、独自の統治機構と政治秩序を持っていた。1253 年にモンゴル帝国の軍隊を統率するクビライが雲南に赴き、大理国を征服した。その際、麗江の麼些詔主である麦良 ^{※12)} がクビライに忠誠を誓い、麼些部族を支配する土司の地位を得た。さらに、10 年後の 1263 年（元中統 4 年）に麦良は茶罕章 ^{※13)} 宣慰司管民官に任命された。その際、官署を羅波（現在の石鼓）に置いた。1274 年（元至元 11 年）に麗江軍民総管府と改制し、麦良は「総管」となった。さらに 2 年後、雲南中書行省を創設し、麗江路という行政制度が始まった。麗江路では一府、七州、一県が管轄下になった。ナシ土司がこの地域の最高の支配者であった。

1382 年（明洪武 15 年）に、明朝が麗江ナシ土司に「木」という姓を授けて、支配権の継続を認め、土司は麗江軍民府の「知府」に任命され、官印が与えられた。明朝に替わって、清朝が 1644 年に北京に入ったが、雲南に籠った明朝の最後の勢力と数年間の戦いを経て、1659 年（清順治 16 年）に雲南を制圧した。翌年の 1660 年に清朝が麗江ナシ土司の世襲制度を承認し、1723 年まで続いた。このように、1253 年（モンゴル帝国憲宗 3 年）から、「改土帰流」政策により土司の支配権が清朝朝廷に取り上げられた 1723 年までの 470 年間に渡り、麗江地区はナシ土司により統治されたナシ王国であった。1723 年に、木氏世襲の麗江土司知府の職が廃止され、職位が「知府」から「通判」に降格された。これは、麗江地区で土司政権が終焉し、ナシ人の支配権が中央に取り上げられたことを意味する。

以上述べたように、1723 年までは、麗江（大研と白沙）は中国の周縁地域に形成された地方王権の首都に当り、その王権と対応した王都と宮室が建設されていた。次に、その王都と宮室はいかなる空間構成になっていたのかを明らかにしたい。

まず、南方の農業・遊牧境界地帯に位置するナシ王国の都はどのような立地条件を選んだのか考察してみたい。麗江の麼些部の酋長は葉古年から数えられ、7 世紀以来、玉龍雪山の麓にある白沙（ナシ語 Boa-shi）という町に支配の中枢を置いていた。『元一統志』の「麗江路通安州」の「坊郭条鎮」条では、「拔沙邑」、「大葉場邑」 ^{※14)} という町の名前が記録されており、これは、現在の白沙、大研 ^{※15)} と思われる。下記の『景泰雲南図經志』巻之五の麗江軍民府条の記録によると、1383 年に麗江ナシ土司が都を大研に建てたことが分かる ^{※16)}。

公廨

布政司分司在府治之西。按察司分司在府治之東。

府治在通安州之大研廂，内有經歷司、照磨所、万鑑庫，洪武十六年建置。所属大有倉，其旌善、申明二亭，去府俱不遠。

祠廟

文昌祠在府庁之後。城隍廟在府西北，有祀典，其同祀者有風雲雷雨山川壇在南郊，社稷壇在西郊，厲壇在北郊

館驛

在府治之西，洪武十六年建置 ^{※17)}。

明の洪武 15 年は、麗江ナシ土司が明朝に帰順した年である。その翌年に「府治」すなわち土司の宮室が大研で建てられた（図 1）。

図 1 土司府城の平面図 出典：『麗江納西族自治県志』、858 頁
なお、土司府城周囲の太線は、城壁ではなく、区域の範囲を示す。

木氏土司の宮室に関する最も古い記録は、上記の『景泰雲南図經志』である。明の景泰年は、1450-1457 年のことである。15 世紀半ばには、木氏土司の「府治」すなわち宮室は、執政の場所と思われる「府庁」があり、官文書を作成および収発する役割を担う經歷司、典勘卷宗の照磨所、財政収支を管理する万鑑庫が設けられた。庁の後ろに、文昌祠があったという。この文昌祠は、いわゆる漢人の文昌廟と異なる。漢人の文昌廟は科挙受験の合格を祈る場所として使われるが、ナシ土司の統治地では、科挙制度がなかったのも、そういう意味の廟ではないのは確かであろう。宮室の後ろの山に祭天の壇があった。さらに、上記の文書は、風、雲、雷、雨、山、川、厲、社稷の祭祀に触れて、ナシ人が最も大事にした祭天のことを記述していないことから、文昌祠が祭天の場所である可能性も否定できない。

以上の祭祀空間が、ナシ土司政権にとって、支配の正統性を示す重要な装置であった。景泰年の記録には、祖先を祭る空間に触れていない。実は、祖廟にあたる木氏勳祠は後世の 1528 年（明嘉靖 7 年）に木公土司（生没年 1499-1553）によって創設された。その建設経緯について、張志淳が撰文した「麗江木氏勳祠碑記」に記されている。また、木公土司が「建木氏勳祠自記」を書いていた ^{※18)}。それらによれば、建設工事の土木、磚石、彩色などは大理の巧工である楊得和によるものだという。詩文と扁額の書などはすべて木公土

祭祀儀礼以外に、都城の経済を支える商業地が都市空間のどこにあったのか。麗江は滇藏、即ち雲南とチベット間の茶馬互市貿易の

This map illustrates the historical and cultural landscape of the Shuangshiqiao area in Suzhou. It highlights several key elements:

- Historical Sites (史跡):** Represented by solid black shapes.
- Key Protected Areas (重点保護地区):** Indicated by thick dashed lines.
- Important Historical Buildings (重要历史的建造物):** Shown as white squares.
- Protected Residences (保護民居):** Marked with diagonal hatching.
- Historical Residences (歷史的民居):** Marked with cross-hatching.
- Key Protected Residences (重点保護民居):** Marked with stippling.
- Open Prohibited Areas (開闢抑制地区):** Indicated by thin dashed lines.
- Bridges (橋):** Represented by double curved lines.
- Three-eyed Wells (三眼井):** Marked with dots.
- Gates (閘門口):** Marked with the letter 'A'.

The map also includes a north arrow and a scale bar ranging from 0 to 300 meters.

図2 鷹江（大研）都市地図 筆者作成（保存指定の歴史的建造物を表示、木府の周囲の点線は宮室建築の大凡の範囲

この市場（現四方街）がナシ土司宮室の北にある（図2）。つまり、これは周礼でいう「面朝後市」の空間配置ではなく、宮室が東向きになっているため、市場は宮室の後ろではなく、左側にある。そうすると、宮室が市場の南方に置かれたのは、市場との関係からというより、黄山の山頂に祭天壇があることが、決定要素となっていたと思われる。

ナシ土司の大研での新しい都の立地は、マクロな視点から見ると横断山脈の三江併流の要衝にあり、雲南と四川とチベットとの交通の中枢に位置する。ミクロな視点から見ると、都は西から北、さらに東へ流れる金沙江により囲まれた麗江壩子の中心に位置し、北に聳える三多神²³⁾が宿る玉龍雪山が屏風となる。この雪山は、南詔国の時期から北岳と崇められ、信仰の対象であった。クビライも大

都のさらに近くの地形を見ると、北東にある象眠山（象山）と西にある黄山が輪になって都を取り囲み、象眠山からの湧き水を水源とする玉河は都市の水脈になる。東の方面では、20里離れた東山と呉烈山が連なって、都を遠方より取り囲む。

中国の宮殿建築の平面配置について、周礼で規定された「前朝後寝」が良く引用されている。しかし、それが漢文化圏の宮殿建築の形式であり、他の文化圏にも適応するとは限らない。北方の例ではあるが、1625年に瀋陽で建設されたヌルハチの宮殿（現在の瀋陽故宮）は、南向きの「朝」に当たる建築群一大政殿と十王亭があり、それと平行して西側に寝殿があった。アルタン・ハーンの都フフホトにおいても、同じく宮室が南向きで、西側が寝殿で、東側に朝政

の殿舎が並列していた。

明朝の記録から麗江の宮室の様子が伺える。1639 年（明崇禎 12 年）に木増土司に招かれて、徐霞客が麗江に行き、その見聞は『滇游日記』に記述された。

郡署踞其（象眠山を指す、筆者）南、東向臨玉河。後幕山頂而上，所謂黃峰，俗又稱天生寨，木氏居此二千載，宮室之麗，擬於王者。……聞其內樓閣極盛，多僭制，故不於此見客云²⁶⁾。

ここの「郡署」とは、土司の宮室である。宮室が東に開けた平野に向けて、西の黄山の麓に寄り添って配置された。徐霞客は木氏土司がここに 2000 年間²⁷⁾も住んでおり、その宮室の豪華さが王者のそのものだとして賞賛し、その建物が「多僭制」と記した。これにより、木氏土司の宮室は明が土司の階級に定めた建築制度の仕様よりも高級であったことが分かる。徐霞客も、この宮室には足を踏み入れておらず、彼は大理にある通事（通訳官）の家に泊まっていた。

後ろの黄山山頂に近い西斜面には、ナシ人が 9 世紀末に建てた祭天のための普得壇がある²⁸⁾。徐霞客の時期には、黄山の俗称は現在の獅子山ではなく、天生寨であったという。ここでは、毎年、正月に祭天の儀式が行われるが、これはナシ人にとっての最大の祭事である²⁹⁾。黄山は、木氏土司が統治していた際には、それ自体が宮室の一部であり、自由に入ることが出来なかった。ここでの祭事の他、正月には土司が一族を統率し、旧都の白沙にある月均壇に山川土穀神を祭祀していた。

時代が降る 1743 年（清乾隆 8 年）の記述から、木氏宮室での執政の様子が伺える。

土司先世，選所屬麼些僉大頭目五六人，戴白纓大帽，穿黑靴。中上目十余人，戴花纓大帽。小土目二十余人，戴藍纓大帽。共理事務，分管各山寨。凡入衙者，令束紅系腰。僉軍理戴花纓大帽，管軍戴藍纓大帽，有事防禦，率領土兵，俱戴黑纓大帽。僉把事、通事、登答、文書，差遣貢獻³⁰⁾。

土司が「麼些」すなわちナシ人の中で役人を選んだ。文官が「大頭目」5、6 人、中級と上級の頭目が 10 人余り、下級の頭目が 20 人余りおり、かれらが共同で協議しながら、それぞれ管轄する山寨を管理していた。武官は「僉軍理」と「管軍」がおり、軍事的な行動を行う時に、「土兵」すなわちナシ人の軍隊を統率する。文官と武官はランクによって、服装（帽子、靴、色）まで決まっていた。また、事務的な役人として、リーダー級の把事、通訳官の通事、職員に登答、文書がいた。

15 世紀半ばの『景泰雲南図経志』と徐霞客の記録によれば、木氏土司の宮室の建物は、東から西の黄山まで配置されていたことがわかる。宮室の建築そのものは、1860 年（清咸豊 10 年）の戦火で大部分が焼失したが、1888 年（清光緒 14 年）に一部を再建し、1897 年（清光緒 32 年）に高等小学堂に転用された。建築史家の劉敦楨が 1938 年に麗江を調査した際、宮室の跡地が小学校として使われ、古い建築は僅かしか残しておらず、全貌はすでに把握できない状態であったという。1960 年代の文化大革命でのさらなる破壊を経て、木氏土司の宮室はほとんど何も残っていなかった。しかし、宮室の跡地からの推定では、宮室の第一門から黄山までは 400 メートル弱の奥行きがあり、そして 100 畝程（1 畝約 667m²）の広さの敷地があった³¹⁾。町の真中を流れる玉河から分水して西河が掘られ、宮室の敷地まで引きこまれていた。

木氏土司の宮室の住まいはどこにあったのか。それは、朝政の建物群の区画の北側に、東から西に配置されており、規模が 536 平方メートルの三進の合院式建物である³²⁾。土司の寝室は第 2 進の正房にあった。正房は単檐懸山の屋根形式で、間口 10 メートル、奥行き 9 メートルとなっている³³⁾。

以上の内容をまとめると、木氏土司の宮室は南向きではなく、東向きとなっている。これは、大理の宮室だけではなく、白沙に建てられた土司の住宅及び仏殿建築もすべて東向きになっている。東の方位はナシ人にとって一番上位の方位であったと伺える。そして、宮室の「朝」と「寝」の空間が、前後ではなく、並列しており、左側に住宅区、右側に朝政空間が配置されていた。

4. 宮室建築の建設年について

現在、麗江の観光スポットになっている木府建築群は、木氏土司の宮室が建っていた跡地に復元したものである。当時の麗江県政府が 1995 年から宮室を再建することを決め、1996 年の地震後に、世界遺産に申請することと合わせて、世界銀行の融資により、1997 年に復元工事を開始し、1999 年に竣工した³⁴⁾。しかし、筆者が復元した建物名とその位置関係を文献史料及び 1938 年の劉敦楨の記録と照合してみたところ、食い違いがあった。また、雲南民家の研究者の蔣高宸は、宮室の復元図を示しているが、考証の過程は全く論じていない³⁵⁾。以下に、文献史料から確認できる宮室の建物を、建設年の古い順から検証していく。

残念なことに、宮室の朝政空間となる建物について、文献記録が発見されていない。かつて宮室の敷地であって、記録で確認できる最も古い建物が皈依堂である。この建物の建設年は、劉敦楨が 1938 年に調査した際、中央の明間の棟木の上に、「皇明成化辛卯孟夏谷旦、太中大夫資治少尹世襲土官木嶽命工□□□□、世祿延長、子孫寧盛、凡皆吉昌……」³⁶⁾の墨書を発見したことで断定された。墨書によれば、1471 年に木嶽土司（生没年 1429-1485）が皈依堂を建設した。劉敦楨のフィールド日記では、皈依堂が小学校のなか、通判署の後ろにあると記している。通判署は「改土帰流」後の名称であり、土司の宮室が転用されたものと思われ、さらに宮室が東向きであることから、その後ろが西側となる。すなわち、前が朝政空間で、その後側に皈依堂が配置されていた。

劉敦楨が、皈依堂の正殿には、左右の間に仏像が彫られた透かし彫りの木板が嵌められ、北壁面及び妻壁には、薄い板壁を張り、その上に明代の絵師が描いたと思われる壁画が多くあると記述しており、皈依堂が仏殿であると判定できる。木嶽土司が 1442 年に即位し、1473 年（明成化 9 年）にチベットのカルマ黒帽七世活仏チュエダクギャムツォに金と茶葉を献上していた³⁷⁾。その 2 年前に皈依堂が創建された。また、木嶽土司の葬儀の読経もチュエダクギャムツォによって行われた。

皈依堂の建築様式について、劉敦楨が以下のように記述している。

正殿東南方、下承石台、東腰処鐫如意紋一列，類明季作風。殿身面闊三間、進深八架。其外繞以走廊……明間上部、原構有藻井……屋頂採用單檐歇山式……其結構原則、与大理聖源寺觀音閣約略相類³⁸⁾

すなわち、皈依堂が東南向きで、明代スタイルと見られる石造の基壇の上に建てられている。正面 3 間、奥行き 4 間（八架）、その

四周に1間の回廊を巡らせている。中央間には藻井を張り、屋根が「単檐歇山式」(単層入母屋)となっている。皈依堂の全景写真がないので、全体的な建築様式について検討する手立てがないが、劉敦楨の日記では、箇条書きに、柱のプロポーションが太く低い、斗拱の「柱頭科」と「平身科」^{注39)}の構造が完全に同じなどと分析していた。さらに、劉敦楨は、組物のスタイルが大理聖源寺の観音閣及び木氏土司が白沙で建てた仏殿建築と同じ特徴が見られると述べた。

土司の宮室及び屋敷街と大研の百姓の市街地は、関門口という門によって区切られていたことを既に述べた。この関門口から宮室の正門に至るまでの道に、複数の牌坊が建てられていた。1561年(明嘉靖40年)に、木高土司(生没年1515-1568)は嘉靖帝から「番木世家」の御書を賜わり、「番木世家」を刻んだ牌坊を建設した^{注40)}。1575年(明万暦3年)、木東土司(生没年1534-1579)は万暦帝から「西北藩籬」の御書を賜わり、「西北藩籬」牌坊を建設した^{注41)}。宮室正門の真ん前に立てられた石牌坊もまた勅建によって、万暦48年(1620年)に木増土司(生没年1587-1646)が建設し、忠義坊と呼ばれた^{注42)}。現在、木府の門前に立っている忠義坊は、1999年に復元したものである。

宮室の中に、万歳聖位の位牌を祀り、祝厘所である玉音楼も、明の万暦年(1572-1620年)に木増土司が建設したという^{注43)}。1598年に11歳の木増が土司の職を世襲した。その在位期間と照合して、玉音楼は1598年から1620年の間に建設されたと推定できる。この玉音楼は、当時の雲南西部で随一の高い楼閣であったという。

木増土司が明の万暦年に蔵書楼を建設したことが、複数の文献によって記されており、万卷楼ともいう。劉敦楨が蔵書楼に関して、以下のような記録を残している。十字の平面を持ち、下檐は平面に沿って回廊を巡らせている。中檐が四面に向き歇山頂(入母屋)にして、上檐が四角攢尖亭(宝形)となっており、珍しい様式で、古いスタイルが残っているという^{注44)}。さらに、劉敦楨は『麗江県志』から、この蔵書楼が明の木氏土司の光碧楼の跡地であり、「改土帰流」後、玉皇閣と改名され、1860年代の戦火で焼失し、1888年に再建されたという。このように、蔵書楼の元の名前は光碧楼^{注45)}であるので、光碧楼と万卷楼が同じ建物であることがわかった。しかし、現在の木府建築では、議事庁の後側に万卷楼があり、さらにその後側に光碧殿があり、二つの建物として復元されている。

また、蔵書楼は朝政区域と住宅区域のどちらに配置されたのか。現在の復元では朝政区域に建っているが、蒋高宸による宮室建築の復元図では、住宅区域にあった^{注46)}。『麗江府志略』では「木増家中有万卷楼」とあり、朝政区域ではなく、住宅区にあった可能性も否定できない。劉敦楨の記録では、教育局の東南側に通判署と皈依堂、北側に木氏勳祠、西側に民衆教育館がある。蔵書楼は、民衆教育館の後側にある^{注47)}。後側とは、一般的に北と思われて、蔵書楼が朝政区域ではなく、住宅区域に位置したと解釈される。しかし、麗江県城市附図(図3参照)では玉皇閣(即ち光碧楼)は教育局の南にあり、劉の文字記録と食い違っている。蔵書楼の位置については今後の論考を待ちたい。

5. おわりに

麗江土司は、明朝と朝貢関係を維持しながらも、周縁地域で王権を持ち、都城と宮室を建設した。ナシ族の独自の文化、伝統と王城

思想を基本に、都城と宮殿の立地と空間構造を形成させた。その特徴は以下のようにまとめることができる。

- 1). 大研にある宮室建築は全て東向きを正面としているが、白沙での明朝以前の土司関連の建物も東向きにしているから、ナシ族自らの空間認識では、南ではなく、東の方位が上位であったことが伺える。
- 2). 宮室建築の「朝」と「寝」の空間が、前後ではなく、左右に並列するように配置されていた。
- 3). 祭天の場所は南郊ではなく、宮室の後ろ(西方)の山にあった。この祭天壇がある山と一体化して宮室建築を構成していた。
- 4). 元々、祖廟を建設する習慣がなく、16世紀初めに『木氏宦譜』が編纂され、はじめて祖先の聖霊を祀る祖廟が建設された。その立地は、宮室の北側にあり、さらに祭天壇がある黄山に寄っている。社稷壇が西郊外にあることから、宮室建築群とは、「左祖右社」の配置関係にならない。
- 5). 商業地が宮室の北側に位置する。東向きの宮室にとっては、左側にある。
- 6). 都城は、方形ではなく、かつ、城壁がない。江川や山などの天険を生かして、都城を守れる環境に立地させた。百姓の市街地と宮室や屋敷住宅地とは、関門口によって分割し、壁を建てず、関門口のところに兵隊を常駐させ、空間境域を分別した。さらに、関門口から宮室の正門までの道に、複数の牌坊を建て、その道を聖なる参道のようにつくりあげた。
- 7). 明朝期において、仏教施設は、一つの仏殿が土司宮室の中に位置し、他は主に白沙に集中させた。
- 8). 宮室の建築様式については、残された僅かな事例から、雲南の西部地域の特徴が有しており、中国中央政権の官式作法の建築様式と異なっている。

参考文献

- 1) 管学宣・万威燕纂修：麗江府志略，清乾隆八年，雪山堂藏版(本稿では、麗江納西族自治县県志編纂委員会弁公室の1993年復刻版を利用)。
- 2) 約瑟夫・洛克著：中国西南古納西王国，雲南美術出版社，1999。
- 3) 劉敦楨：劉敦楨全集，第3、4巻，中国建築工業出版社，2007。
- 4) 方国瑜著、林超民編：方国瑜文集，雲南教育出版社，2001。
- 5) 方国瑜編：雲南史料叢刊，第1巻から13巻，雲南大学出版社，1998。
- 6) 麗江納西族自治县編纂委員会編：麗江納西族自治县志，雲南人民出版社，2001。
- 7) 木麗春：納西族通志，雲南人民出版社，2006。
- 8) 王崧等纂、阮元等修：雲南通志稿，216巻，巻首3巻，清道光15。
- 9) 上海涵芬楼景印清史館藏進呈寫本：嘉慶重修一統志，商務印書館，1934。
- 10) 朱文良主編：麗江納西族民居，雲南科技出版社，1988。
- 11) David Jackson : A History of Tibetan Painting : The Great Tibetan Painters and Their Traditions, Indo-Iranian Journal, Vol. 41, No.4, Springer Netherlands ,1998.

注

- 注1) 詳細は妹尾達彦、「都市の千年紀をむかえて——中国近代都市史研究の現在」(『アフロ・ユーラシア大陸の都市と宗教』、中央大学出版社、2010、pp.63-141)および、同、「中国城市建築史研究在日本」(東南大学建築学院編著『劉敦楨先生誕辰110周年記念暨中国建築史学史研討會論文集』、東南大学出版社、南京、2009、pp.117-125)を参照。
- 注2) 包慕萍、「モンゴル地域フフホトにおける都市と建築に関する歴史的研究1723-1959：周縁文化圏における異文化受容」、東京大学博士学

- 位論文、2003。同、『モンゴルにおける都市建築史研究——遊牧と定住の重層都市フフホト』、東方書店、2005 など。
- 注 3) ナシは自称で、歴史上でいくつかの別称がある。『新唐書』、『元史・地理志』などでは、「麼些」、他の地方志では摩娑、末些、越析などと記される。すべて Mosso の表音異体字である。しかし、これらで「麼些」と呼ばれた族群は、現代のナシ族より広い範囲になる。
- 注 4) 中国の歴代王朝は、近隣の諸国・諸民族との間で冊封・朝貢という君臣関係を擬した外交関係を築き、その際、中国との外交や朝貢を求める諸国・諸民族の勢力の大小に応じて、王号や府・州・県の知事職、軍事指揮官の称号を与えた。土司は、中国の省以下の府、州、県レベルの自治権を持つ異（非漢）民族支配者の長官（王）である。土司制度は清朝までに広東省、広西省、雲南省、貴州省、四川省からチベット、青海までの広い範囲の諸民族地域で実行されていた。
- 注 5) 「改土帰流」の「土」とは、異民族地域の在地の支配制度、すなわち土司政権のことを指す。従来の土司政権が朝貢と回賜の儀礼を通して、中央政権と緩やかな帰属関係を結び、在地では、統治機構、軍隊、司法などの自主権を持っている。中央政権が在地の支配勢力を温存して執行していた土司制度を清雍正元年から取りやめたことを「改土」で表す。「帰流」とは「本流に帰る」、すなわち中央政権による支配を一本化すること。
- 注 6) 「改土帰流」による土司制度の崩壊については、武内房司著「西南少数民族——土司制度とその崩壊過程をめぐって」（『明清時代史の基本問題』、汲古書院、1997、pp. 581 - 606）を参照。
- 注 7) 麗江の世界遺産の申請プロセスに関しては、実際に世界遺産の申請手続きをした中国国家文物局官員、ICOMOS 中国委員会副会長の郭旃氏が「文化財建造物等の地震対策に対する日中専門家ワークショップ」（日本文化庁・中国文物局・東京文化遺産国際協力センター共催、筆者が通訳として同席）の講演で明らかにした。また、郭氏は、2008 年 5 月の四川大地震直後に、震源地である汶川県に立地する礪波村を「チベット、チャン族の碉楼と村寨」と名付けて、危機遺産として申請したが、不許可になったと報告した。『文化財建造物等の地震対策に対する日中専門家ワークショップ報告書』（東京文化財研究所、2009）を参照。
- 注 8) 山田勲之、「明代の雲南麗江ナシ族・木氏土司とチベット世界との関係——カルマ派との関係を中心に」、『日本西蔵学会会報』第 54 号、2008、pp.79-92。同、「『木氏官譜』と『皇明恩綸録』から見る雲南麗江ナシ族・木氏土司と明朝との関係」、『国際文化学』第 19 号、神戸大学、2008、pp.29-42。
- 注 9) 河原洋子、「白沙四方街に面する商店建築の保存—中国世界遺産麗江旧市街白沙集落において」、『日本建築学会計画系論文集』第 651 号、2010、pp.1309-1315。同、「街尾村白沙街沿い民家の分析：中国世界遺産麗江旧市街白沙集落において」、『日本建築学会計画系論文集』第 619 号、2007、pp.251-256。
- 注 10) 山村高淑、「開発途上国における地域開発手法としての文化観光に関する研究—中国雲南省麗江ナシ族自治県を事例として」、東京大学博士学位論文、2001。
- 注 11) Joseph F. Rock は 1922 年にアメリカ農業省に農業観察員として極東に派遣され、中国の西南部にやって来て、麗江を拠点にして生活し、その間、アメリカ国家地理協会、ハーバード大学植物研究所からの仕事も行った。彼は植物と動物の標本を収集しながら、写真撮影を続けた。のちにナシ族に関する研究に情熱を注ぎ、1935-1945 年『ナシ・英語百科辞典』（*A Nakhi-English encyclopedic dictionary*. Rome: I.M.E.O., 1963）を完成し、『中国西南古ナシ王国』（*The Ancient Na-khi Kingdom of Southwest China*. 2vols. Harvard Univ. Press, 1948）を出版した。
- 注 12) 『元史』本紀・世祖一、「麼娑蛮主迎降」とある。方国瑜の「麼些民族考」（『方国瑜文集第四輯』、雲南教育出版社、2001、p61）によれば、この「麼娑蛮主」とは麗江壩子にいる葉古年から世襲してきた 23 世のナシ王の麦良のことである。
- 注 13) 「茶罕」はモンゴル語「白」の当て字で、「章」はチベット人が麼些族に対する称呼ジャン Vjang の当て字である。即ち、「茶罕章」は「白いナシ人（の地区）」と解釈でき、現在の麗江地区を中心とした地域である。当時の麼些族は、白いと黒い族群の区別がある。大理は「カラ・ジャン」すなわち「黒いジャン」と元朝の時期に呼ばれていた。
- 注 14) 方国瑜主編『雲南史料叢刊』第三卷、雲南大学出版社、1998、p96。
- 注 15) 研、尤、葉は、木氏土司の祖先である葉古年が統領したナシ部族の当
- て字と言われている。現在の大研城は、明の時期には大研廂、清の時期は大研里、民国時大研鎮と呼ばれていた。
- 注 16) 阿良阿胡土司や阿胡阿烈土司が在位する元代から、都が既に白沙から大研城に移ったとの説もあり、これは通安州の治所を大研に置いたとの考えからであるが、後世には、通安州の治所は現在の大研より東へ 3 里離れた場所にあったと清の地方志が記録している。
- 注 17) 方国瑜主編『雲南史料叢刊』第六卷、雲南大学出版社、2000、p89。
- 注 18) 『麗江府志略』芸文略、pp. 232-237。
- 注 19) 『中国西南古納西王国』、p108。
- 注 20) 『麗江府志略』建置略、p57。
- 注 21) 楊世光著『麗江史話』、雲南人民出版社、2001、p13。『麗江納西族自治県志』、p844。
- 注 22) 樊炎冰編著『世界文化遺産：中国麗江古城』、中国建築工業出版社、2005、p120。
- 注 23) Sa-ddo は山神で、ナシ人の保護神として信仰されている。ナシ人は「三多祭」を祭祀し、南詔国の 9 世紀から雪山には三多神を祀る北岳廟が創設されていた。俗称は三多廟である。木氏土司は毎年、旧暦 2 月 8 日に三多神を祭祀する。
- 注 24) 正徳『雲南志』第 11 卷、志 11、麗江軍民府条・祠廟条、方国瑜主編『雲南史料叢刊』第六卷、p208。
- 注 25) 『麗江府志略』山川略、pp. 70-71。なお、クビライが石門関でチベットから大理に進軍したことから、この関は「太子関」とも呼ばれる。
- 注 26) (明)徐弘祖著、褚紹唐など整理『徐霞客遊記』滇游日記六・七、上海古籍出版社、1980。
- 注 27) 『木氏官譜』で記された初めの土司が葉古年であり、唐朝の武徳年（618-626 年）の人であった。そして、詳細な歴史は不明であるが、葉古年の前には 11 代がいたという。さらに、ナシ人は、紀元前 3 世紀ごろから、青海当たりの湟河から金沙江へ移ってきたというので、徐霞客がこういった伝説に基づいて 2 千年間としたのであろう。
- 注 28) 『麗江府志略』礼俗略、p202。
- 注 29) (元) 李京撰、王叔武輯校『雲南志略輯校・諸夷風俗』には、「不事神佛、惟正月十五日登山祭天、極嚴潔」とある。
- 注 30) 『麗江府志略』芸文略・曾長の条、p336。
- 注 31) 遺跡の敷地の大きさは、蒋高宸『麗江——美麗的納西家園』（中国建築工業出版社、1997 年）p64 による。
- 注 32) 木氏土司の住宅地は、現在「木府家院」、「木家院」と呼ばれて、清の光緒年に再建され、1997 年に修理されている。詳細は『世界文化遺産：中国麗江古城』pp. 240-243 を参照。
- 注 33) 国家文物局主編、雲南省文化庁編著『中国文物地図集・雲南分冊』（雲南科技出版社、2001）、p271。
- 注 34) 復元設計は四つの会社に依頼し、江南地域の古都を参考にして、最終的には南京の金陵飯店で設計案を選定したという。鶴慶、劍川、麗江の出身のナシ族、白族、漢族の中で、高い技能が持つ職人を集めて工事を行ったという。詳細は、郭大烈著「重修木府記」（『木府風雲録』、雲南民族出版社、2006、pp. 173-174）を参照。
- 注 35) 『麗江——美麗的納西家園』、pp. 64-66。
- 注 36) 『劉敦楨全集』第 4 卷、中国建築工業出版社、2007、p61。
- 注 37) Karl Debreczeny : Dabaojigong and the Regional Tradition of Ming Sino-Tibetan Painting in the Kingdom of Lijiang, Edited by Matthew T. Kapstein, Buddhism Between Tibet and China, Studies in Indian and Tibetan Buddhism, 2009, pp. 97-152。
- 注 38) 同注 36、p61。
- 注 39) 柱の上に置く斗拱を柱頭科、日本の詰組のように、柱と柱の間の枋（頭貫）の上に置く斗拱を平身科という。
- 注 40) 『麗江府志略』人物略、p171。
- 注 41) 『皇明恩綸録』第 22 節に記載されている詔書による。
- 注 42) 『中国西南古納西王国』、p75。
- 注 43) 『麗江府志略』山川略、pp. 90-91。
- 注 44) 『劉敦楨全集』第 3 卷、中国建築工業出版社、2007、pp. 239-240。
- 注 45) 『中国文物地図集・雲南分冊』p273 によれば、光碧樓が 1983 年に大研の北にある玉泉公園に移築された。
- 注 46) 『麗江——美麗的納西家園』、p65。
- 注 47) 雲南西北部古建築調査日記、『劉敦楨全集』第 3 卷、pp. 239-244。

(2012 年 1 月 9 日原稿受理、2012 年 6 月 18 日採用決定)